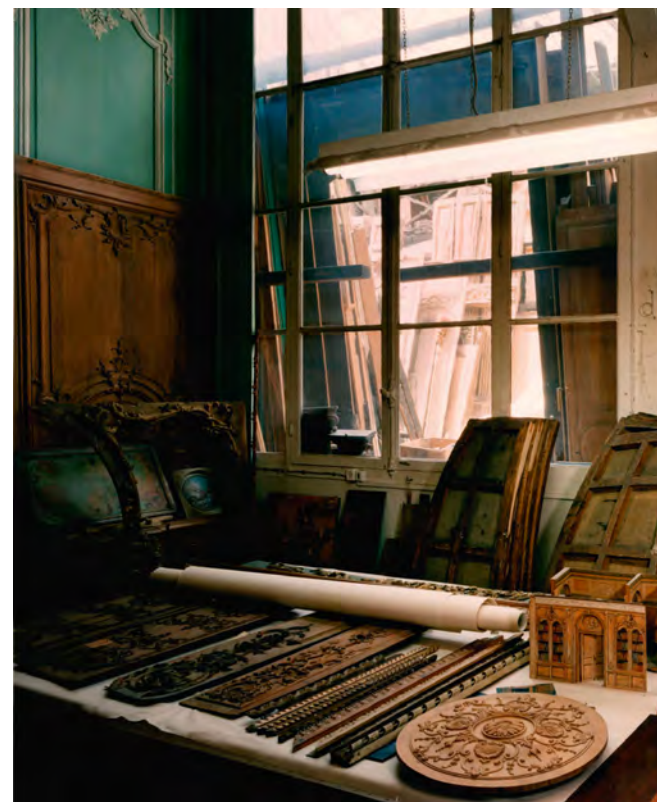




## パリ、路地裏のラビリンス

フランスの壮麗な邸宅の室内を400年以上もの長きにわたって飾ってきた、装飾的な木製のパネル、ボワズリー。アンティークな木彫細工の忠実な修復や複製で、目の肥えた顧客を唸らせるフェオ&カンパニーのパリのアトリエを訪ねる。 文 ジェローム・コワニャール



パリ17区の閑静な路地に、古風な趣の小さな店がひっそりと優雅にたたずんでいる。緑に塗られた店の正面のガラス扉を開けると、思いもよらない光景が待ち受けていた。花たちがさざめき、ラ・フォンテーヌの寓話から抜け出してきたような動物たちが、女人像柱や恐ろしい仮面の陰で浮かれ騒ぐ……。さながら時代を超越した魔法の世界のようなショールームが、来る者を歓迎してくれる。それが、フェオ&カンパニー(フェオ社)だ。

ガラス張りの高い屋根の下にあったのです」と語るギヨーム・フェオは、同社の取締役に就いて15年以上になる。木植や響の音や、鼻をつくニスの臭いが消えたことを除けば、この部屋は19世紀後期からほとんど変わっていない。アンティークの木製品やボワズリーの複製で世界的に名高いフェオ社は、パリの本店以外に、シャンピニー・シュル・マルヌとムシールヌフに広々とした工房を構え、さらに南部のシャラント県にも彫刻と仕上げ専門の工房を置いている。

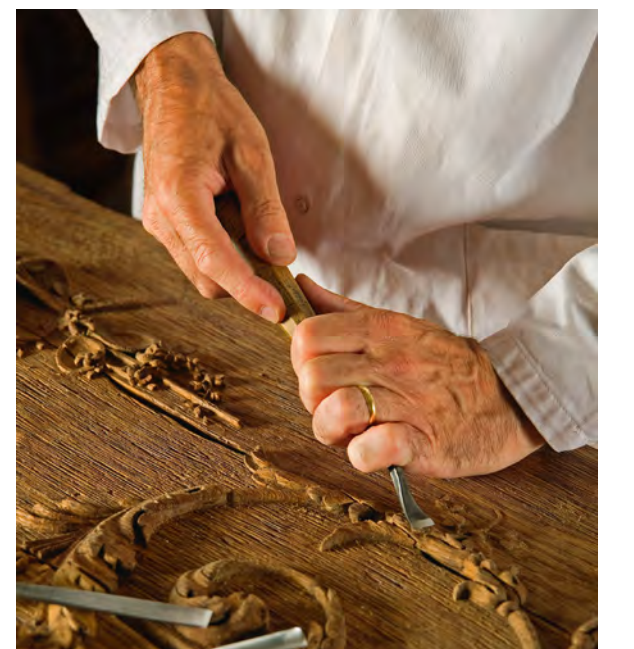
正社員は約40人だが、注文が重なる200人を超す従業員を抱えることも珍しくないという。「15人の彫刻家に3年間、休む間もなく仕事をしてもらったかと思うと、誰ひとりいなくなることはありません。この柔軟さが、私たちの仕事には不可欠なのです。大きなプロジェクトにも即座に対応しなければなりません。今、約30件の注文を抱えています。そのうち3つは2万平米を超す大規模なものです」。品質の一

貫性は、工房の監督たちによって維持されている。フェオとはかれこれ25年の付き合いになる金箔師の親方など、フランス職人同業者組合で昔ながらの訓練を受けた選りすぐりの熟練職人である。

フェオが創設した会社は、1916年にレイモン・ゲレルに買収され、1960年代にギヨームの祖父が買い取った。ギヨームの父ジョエルはパリの有名な室内装飾会社メゾン・ヤンセンで訓練を受け、同社に勤務していたこともある。ギヨームは子どもの頃からこの世界に興味を持ち、古い記録の蒐集に没頭したが、それはまるで穴の空いた樽を満たすような作業だった。「完成するには何世代も要するであろう大作業でした」と彼は思い出して苦笑する。16歳の時、家族は彼に会社の株を買うようすすめたという。ビジネススクールを卒業後、彼はサンフランシスコで会社の設立を試みたが、少年時代に熱中した室内装飾への思いが募り、フェオで経営の手綱をとるようになった。自力で店舗を買い取った彼の指揮下で、会社は新たな方向に進み始め、椅子張りやカーテンの注文まで請け負うありふれた装飾業を脱却。大規模な室内装飾の企画立案や自社製品の製造、アンティ-

クの木製品の売買など、創設者シャルル・フルニエの時代の事業に回帰したのだった。

250組もの超一流の装飾パネルが、熱烈な愛好家との出会いを待ちわびている。最近落札した仮面や楽器で装飾されたパネルは、ルイ15世がボンパドゥール夫人のためにヴェルサイユ宮殿の一角に建てた小トリアノン宮殿にあったものである可能性もある。その向こうには、四大陸を象徴する動物を彫った一連のパネルが壁にずらりと立てかけられている。これは



【前見開きページ】19世紀パリの優雅なタウンハウス内にあるフェオ社のドアを開けると、入り組んだ彫刻を施したパネルや鏡、扉で埋め尽くされているのが見える。この部屋は、イル＝ド＝フランス地方にあった城の華麗な室内装飾をフェオ社が忠実に再現したものである。【当見開きページ】(上) 装飾的な塑像の数々は、アンティークのものや複製品が混在しており、過去4世紀のインテリア・デザインの歴史を概観できる。(左) 装飾パネルの巨匠でフェオ社の創設者であるシャルル・フルニエの工房だった展示室。(右) 作業をするフェオ社の職人。パリのカフェ・ブーシキンの室内装飾に用いるオーク材のパネルに彫刻を施している。

名建築家クロード・ニコラ・ドゥーの手になるもので、かつてメゾン・ヤンセンが所有していたのだが、ポルトガルの蒐集家がい取った。「これはドゥーがカフェ・ミリアーレの室内装飾を手がけた後、間もない時期につくられた作品。まさに18世紀最高峰のアンサンブルです」とフェオは絶賛する。別の部屋では、ナポレオンの宮殿を設計した建築家ベルシエとフォンテーヌによる装飾パネルが、フランス新古典主義の厳かで優雅な雰囲気を放っている。



彫刻が施された  
装飾パネルを指先でなぞると  
まるで巨大な書物を  
ぱらぱらとめくっているような  
気分になる。

これは、皇帝の継息子の邸宅だったポアルネ邸（現在はドイツ大使館）にあったものと考えられている。彫刻が施された装飾パネルを指先でなぞると、まるで巨大な書物をぱらぱらとめくっているような気分になる。同社の貴重な所蔵品のなかでも特に圧巻なのは、1925年に家具デザイナーのエミール・ジャック・リユルマンがデイリー・ミラー紙を所有していた新聞王ロザミア卿のために意匠を凝らしたパネルだ。洗練された浅浮き彫りや、堂々とした円柱を配したマホガニーとローズウッドの装飾パネルは、クリーニングされて蜂蜜のような金の色合いを取り戻している。これは、リユルマンが家具を設え、室内装飾を施した、シャンゼリゼ通り154番地に立つ典型的

なアールデコ調のアパルトマンの、広い応接室に飾られていたものである。2009年にパリのクリス

ティーズで並みいるライバルの鼻を明かし、オークションの「最高賞」ともいべきこの作品を落札したとき、ギヨーム・フェオは我が身の幸運を信じることでできなかった。喜びよりもむしろ、こうした貴重なセットが歴史的記念建造物に指定されず、ばら売りされていることに当惑したという。「これまでにどれだけのパネルが無造作に失われてきたか想像もできません。最近買ったルイ16世時代の装飾パネルのセットなど、廃棄物のコンテナに放り込まれて、あやうくゴミ捨て場へ持っていけるところだったのです。1780年代の紛れもない傑作なのに、6、7回も厚く塗り重ねられたせいで、無残にも彫刻の躍動感が失せ、19世紀の模倣品のような有様でした」

このリユルマンの装飾パネルのアンサンブルは、すぐにも大きな博物館に所蔵されるべき貴重な作品だ。買手はしばらく公表されそうにないが、フェオ社の顧客には近年オーブン予定のアブタビのルーブル美術館や、ベルナル・アルノー、マルタン・ブイグ、フランソワ・ピノー、17世紀パリ建築の至宝

ランベール館を所有するカタール王子など、裕福な美術愛好家が数多く名を連ねている。そして同社が所蔵する名品のなかには、建築家ヨーゼフ・ホフマンが設計したウィーンのウィラ・プリマヴェーラの室内装飾といった傑作も含まれている。そこにはまさに、18世紀の華麗な部屋の数々やポアルネ邸などに影響を受けたトルコ風のブドワール（婦人の部屋）などが再現されている。

フェオ社の工房ではアンティークの彫刻を修復し、欠けた部分があれば補い、回転ピンを用いた伝統的な技法で再び組み立てる作業が行われている。これは装飾パネルの黄金時代である18世紀から受け継がれてきた高度な技術なのだが、25年ほど前から鋳物を使って木製パネルを再生する補助的な手法が用いられている。鋳物の工程は、ニキ・ド・サンファルやアルマン、セザールなどネオリアリズム運動の美術家のために鋳造を一手に引き受けていたアリゴンの協力を得ていたが、現在はムシーにある同社の工房で行われている。密度の高い樹脂を用いることで、オーク材に匹敵する硬度が得られ、ディテールまで鮮明に表現できるという。

ギヨーム・フェオは実験をた



めらわれない。アンシャン・レジーム期の装飾的な彫刻の洗練された優美さをコンクリートで再現し、その作品は、3年前にパリの百貨店ブランタンにオーブンしたカフェ・プーシキンの室内を飾っている。「18世紀の室内装飾を現代建築にマッチさせることに躊躇はありません。オバマ大統領一家が暮らすホワイトハウス居住区の改装を担当したマイケル・スミスと、セントラル・パークを見下ろすアパートメントで大がかりな装飾を行ったときは、部屋全体を真っ白に塗りました。これが、ジャーマンシルバーを貼った寄木張りの床とよく調和するのです。家具はアンドレ・デュブルエリなど一流デザイナーのものを選べました」

18世紀の装飾芸術を心から愛し今日に伝え広めるギヨーム・フェオは、現代のデザインや建築に対しても確かな審美眼を備えているという点からも、注目を集めている。それは現在、彼が取り組んでいる野心的なプロジェクトに、慧眼の名建築家フランク・ゲーリーを起用するようクライアントを説得しているところに、如実に表れているのである。◆  
オーナー専用サイトの「パテック・フィリップ マガジン・エクストラ」(Patek.com/magazine)にて、特別関連コンテンツをご覧いただけます。

(右) ナポレオン時代の華麗な装飾パネル。デュッセルドルフの蒐集家の私邸に設えるため修復中。  
(左) ウィーンの顧客のために制作された豪華な化粧室の装飾。衣装部屋を飾るリージェンシー様式の装飾パネルは特注品で、中国の漆細工をイメージしている。